

## 奥村隆著『反コミュニケーション（現代社会学ライブラリー 11）』弘文堂（2013年）

「コミュニケーション能力」という言葉をよく聞くようになったのはいつ頃からだろうか。「コミュニケーションスキル」という言葉も耳にする。企業の研修などではコミュニケーション能力（スキル）は重要なテーマであると聞く。経団連が毎年行っている調査<sup>(注)</sup>でも、「選考時に重視する要素」として「コミュニケーション能力」が10年連続でトップを占めるという。就活生のみならず、現代に生きるわたしたちにとって、「コミュニケーション（能力／スキル）」は良きにつけ悪きにつけ、無関心ではいられないものであろう。

わたしはこうした状況を、情報化の進展とか、社会における多様性の進行などの変化と関連付けて、さもありませんかと思う一方で、違和感をおぼえてもきた。確かに、仕事の上で円滑なコミュニケーションが必要で望ましいものだということはわかる。コミュニケーション不全によって問題が発生することを経験している。しかし、コミュニケーション能力を称揚する大合唱には何となく胡散臭さを感じる。それに、能力とかスキルは一般に、あるに越したことはないものと思いがちだが、本当にそうだろうか。何事も、良い面があればそうでない面もあるのではないか。みんながみんなコミュニケーションの達人になる必要があるのだろうか。

『反コミュニケーション』。刺激的なタイトルである。さらに、帯には『『よくわかりあう』コミュニケーションは楽しいだろうか』とある。これはキャッチーだと編集者（？）は思ったのだろう。その思惑にまんまとはまり買って読んでしまったわけだが、これが人目を惹く言葉なら、私の感じる違和感はそれほど特殊なものではないのかも知れない。

本書は、刺激的なタイトルとは裏腹に、コミュニケーションについて「真面目」に追究した本である（もっとも、コミュニケーションをめぐるある種の真面目さに対する“解毒”を狙っているフシはあるが）。けれど、堅苦しくはない。ルソーにはじまり、ジンメル、ハーバーマス、鶴見俊輔、ベイトソン、ジラルド、ゴフマン、ルーマンなどなど、社会学者を中心に「思想界の大スターを歴訪」（帯の文句）しての架空対話が繰り広げられる。そこで目指されるのは、コミュニケーションをめぐる想像力を広げ、コミュニケーションから自由になる、あるいはコミュニケーションを自由にする、その糸口を探ることである。

著者はコミュニケーションを社会学の切り口で研究し、大学で「コミュニケーションの社会学」「自己と他者の社会学」などを講じている。だが、コミュニケーションは嫌いだという。嫌いで苦手だが、それなしには生きていけない、だからコミュニケーションについて考える、それが本書の出発点である。

「歴訪」のほんのさわりだけを紹介すると、障害物を取り去った完全な理解（「透明なコミュニケーション」）をめざすルソーに対し、ジンメルは「距離」をとり合うことで差異や「秘密」はそのままに自由にかかわる「遊戯」としてのコミュニケーションを描く。ハーバーマスは真理・正当・誠実という基準を満たし「強制なき合意」に達するような「対話」としてのコミュニケーションに価値を置く。それらはいずれも「完全」なコミュニケーションを目指す「ユートピアニズム」である。しかし、鶴見俊輔との対話からは、不完全さを受け入れ、「ディスコミュニケーション」を直視する強さを持つことの必要性が浮かび上がる。。。。。

対話を繰り返すことで、個々の思想が相対化され、別の文脈に位置づけられる。そのことで新たな発見があり、行き止まりに思えた壁にドアが見出される。著者の思索はあちこちを飛び回っているように見えて、らせん状に深まっていくようでもあり、ちょっとしたミステリーツアーのようなワクワク感がある。

著者の嫌悪感や苦手意識は結局、「よくわかりあう」のが「よいコミュニケーション」だという前提（思い込み？）に向けられたものなのだろう。だから、コミュニケーションを自由にする、想像力を広げることが目指される。他者が「あらゆる喜びと感動」の源泉であると同時に、「不幸と制約」の源泉でもある（見田宗介）という言葉がさす、コミュニケーションというものはらむ二重性や両義性、コミュニケーションを通じた変容などを取り込むことで、コミュニケーションをめぐる思考は大きく豊かに膨らんでいく。「他者は不気味で恐ろしい。だけど不気味な他者といるのがうれしい」（本書終章）。矛盾しているようだがそのあたりにほんとうのこと、リアルな何かがあるのではないか。（湯浅 論）

(注)「新卒採用に関するアンケート調査」：2013年4月入社対象の調査は2013年11月実施、会員企業のうち1,301社を対象にして583社が回答（回収率44.8%）。